

グトウの夜に

大川 謙作

(おおかわ けんさく)

東京大学東洋文化研究所助手



フィールドで
考える

二八日の翌日が三〇日!?

「グトウの夜には、せひうちに来てくださいね。」

そう誘われたとき、すでに別の家のグトウに招待されていたはくは、せっかくの招待を断るのが惜しくて一瞬言葉に詰まった。だから、西暦で二月八日ですと言われ、おかしいなと思いましたが、嬉しかった。もうひとつの招待の日は、二月七日だったからだ。これならふたつの家のグトウを体験することができる。

グトウはチベット暦新年直前の一大イベントといつてよい。チベット暦の二月二十九日におこなわれることになっている。チベット暦の二月は三〇日までなので、正月の二日前にあたる。この日チベットの人たちは家の大掃除をし、夜にはグトウという特別のうどんを食べ、家から鬼を追い出し、外では爆竹を鳴らして旧年の厄を祓う。

ではなぜ今回はグトウの日が二回あるのだろうか? 答えはチベット暦と関係しているようだった。その年のチベット暦新年は西暦で二月九日だったので、本来なら二月七日がグトウの日となる。だが、このチベット暦なるも、西暦とは随分違う独自の暦算のロジックによって算出される。縁起の悪い日はとばしてしまったり、逆に同じ日や同じ月が二度続くこともある。そして偶然にも、ほくが招待された年のチベット暦二月は、二八日の翌日が三〇日になっていた。つまりグトウ

ウの日である二十九日が存在しなかったのだ。チベットの人たちも大いに迷ったようだが、二八日にやるところもあれば三〇日にやるところもある、という風に各自勝手に日を決めていた。

儀礼途中の携帯電話

チベット暦の二八日、最初に招待してくれた家にまず伺うことにした。夕方着いたときには、家はびかびかに掃除されており、新年のための飾りもだいぶ完成しているようだった。招待してくれた家のお父さんが麵粉をこね始める。ほくも教えてもらって、一緒に麵を作る。ついにお父さんは、同じ生地を使って夜の厄祓いに使う人形を作り始めた。両親に子どもが二人、それからほくたち客人の六体分だ。できあがった人形を体にこすりつけ、口元にもっていつてつばを吐きかける。これで旧年の厄が人形に移された。後は松明をたいて家の鬼を追い出し、人形をグトウの食べ残しとともに、三叉路に捨てればいいのだ。

ちょうどそのとき、ほくの携帯電話がなった。チベットといつてもラサは大都会。携帯からは学生でももっている。電話の内容は、翌日招待してくれていた家から、グトウを今夜やることに変更したということだった。ほくはそちらには何えなくなってしまった。理由は聞いたけど、きちんと教えてはくれなかった。仕方なく最初の家でグトウを食べ始める。グトウに

はちよつとした仕掛けがあつて、ニョッキのような麵のほかに、同じ生地から作った団子が一人一個ずつスープのなかに浮かんでいる。この団子の中身は、唐辛子だったり炭だつたり茶碗のかけらだつたりする。唐辛子だつたらその人は「口が辛い」、「つまり「口が悪い」、炭が出てきたらその人は「腹黒い」などなど、いろいろな意味のものや悪い意味のものがあり、家族でお互いに何が出てきたか冷やかしかしいながら大笑いする。楽しい演出といつた感じだ。食後、鬼祓いの爆竹のなか、表の通りに身代わりの人形を捨てに出る。ほくも付いていったが、爆竹の直撃を耳に受けてしまつて閉口した。そうして騒がしい夜は終わった。でもグトウの日付が変わつた理由はちよつとした疑問として残つた。ほくだけでなく、多くの友人が「明日やるつもりだったのだけど、急に親戚から電話がかかつてきて、何が何でもグトウは今日やらないといけない」と言われたと教えてくれた。彼らにも理由はわからないうつた。

ダライラマの「魂の日」

事情の大半は後日判明した。チベットの暦学と占星学によると、人はすべて「魂の日」をもつのだが、キャンセルされたチベット暦二月三〇日は、折悪しく、遠くインドに亡命しているチベット仏教の最高指導者、ダライラマの「魂の日」であつたといつた。ダライラマの「魂」を祓う

ことは不吉なことであるので、今年のグトウはチベット暦三〇日ではなくその前日の二八日におこなうべし、との見解がインドで表明されたらしい。その見解はさまざまルートを経てチベットに達した。一方、じつはラサ市の政府はグトウをチベット暦三〇日におこなうよう指導をしていたらしい。二八日の朝には市内の社区組合がその日のグトウを禁止する指令をもつて音戸を訪問してまわつた。だが、その指導は無視され、ラサ市内のグトウは二八日にほぼ統一されておこなわれた。年中行事の調査は難しい。聞き書きや文献によつて大体の事実関係は把握できるけれども、行事の裏舞台まで知りえるわけではない。にぎやかで平和なグトウの夜に、当事者であるチベット人たちの大多数にも知られないまま、きな臭い闘いが繰り広げられていたのだ。ダライラマをめぐる政治の暗い影がチベットを覆つていて、年中行事でさえそうした政治経済の状況の知識なしには理解できないといふことが、研究者にとつての教訓になるのかもしれない。でもそのような理解はどこかほくの体験と食い違つているように思つた。結局のところ、多くのチベット人はそうした政治状況には無頓着であつた。むしろ、あの夜の少しばかり特別な雰囲気こそがグトウの本質であつたのかもしれない。グトウの夜には、中国化以前から、チベット人たちは楽しい団樂の温もりと祭りの夜の高揚とともに、鬼祓いの緊張をも味わつてきたのだから。



身代わりの人形を入れた箱。食後にグトウの食べ残しをこの箱に入れて表の三叉路に捨てに行く

身代わりの人形はどこかユーモラス。貝殻型の、ちよつとニョッキに似たものがグトウの團。団子の中には塩や茶碗のかけらがすでに仕込まれている

グトウの麵と具をつめる団子を作り始める。階下の台所では母親がスープを作っている

グトウ近影。停電のためにうまく撮れていないのが残念

「あたり!」というわけではないけど、グトウの団子からなにかいいものが出てきたのだから